

令和元年度渡島管内教育実践表彰

渡島教育局では、広く教育に関し、優れた実践活動により学校教育又は社会教育の向上に大きく貢献し、その功績が極めて顕著な団体又は個人を表彰し、管内教育の充実振興を図ることを目的に、昭和42年度から毎年「渡島管内教育実践表彰」を実施しています。

今年度は、学校教育関係から8つ、社会教育関係から2つ、計10の学校、団体及び個人を受賞者として決定し、令和2年（2020年）2月27日（木）及び3月11日（水）に各場所を訪問し、伝達式を実施しました。

受賞者の方々には、渡島教育局 五十嵐局長より表彰状が授与されました。



【北斗市立上磯小学校】



【函館市立北中学校】



【北海道函館聾学校】



【北海道函館五稜郭支援学校】



【函館市立桔梗小学校 山本 昇吾 主幹教諭】



【七飯町立大中山中学校 佐藤 崇行 主幹教諭】



【北海道函館中部高等学校 白鳥 宏之 主幹教諭】



【道南特別活動研究会】



【もりまち太鼓保存会】



【砂原権現太鼓保存会】

受賞者の業績については、次のとおりです。

北斗立上磯小学校

校長 三浦 哲也

学級数 18学級 児童数 441名 教職員数 28名

学校全体での包括的な授業改善の推進

永年にわたり、学校教育目標「豊かな子 学ぶ子 創る子 思いやる子」の実現を目指し、知・徳・体の調和のとれた子どもの育成に取り組んでいる。

特に、「Try! Try! やってみよう 努力しよう!」を合い言葉に、習熟度別指導の充実、教科担任制の導入や道徳科の授業改善等を推進し学校全体で包括的な授業改善を図るとともに、学校、家庭及び地域が連携・協働した教育実践を広く発信するなど、管内の教育活動の改善・充実に大きな成果をあげている。

また、校訓である「文武両道」の具現化に向け、「上小元気アップチャレンジ」などの体力向上の取組、社会性や人間性を育む課外活動の充実にも力を入れ、その成果は高く評価されている。

函館市立北中学校

校長 滝澤 智子

学級数 8学級 生徒数 232名 教職員数 16名

生徒の学力向上や自己管理能力の育成

永年にわたり、学校教育目標「自らめあてをもち粘り強く学習する生徒 豊かな心をもちみんなのために尽くす生徒 健康や安全につとめ進んで運動する生徒」の実現を目指し、「自ら考え 自ら学び 主体的に行動する生徒」の育成に取り組んでいる。

特に、平成30年度から、渡島教育局研究指定校として、「『生き抜く力』を育む学習指導の工夫」をテーマに研究に取り組むとともに、小・中学校の接続を意識した授業づくりを推進するなど、管内の教育活動の改善・充実に大きな成果をあげている。

また、生徒の学力向上及び自己管理能力の育成に向け、自己管理手帳を活用した生活習慣改善の取組、卒業時の15歳の姿を見通したキャリア教育の実践にも力を入れ、その成果は高く評価されている。

北海道函館聾学校

校長 海田 俊 昌

学級数 6 学級 生徒数 10 名 教職員数 16 名

地域社会とともに共生社会の担い手を育成する教育実践

永年にわたり、管内における小中高の在籍児童生徒に対する教育相談活動について中心になって取り組むなどの地域支援に努めるとともに、就労継続支援A型事業所と連携して弁当を商品開発し、販売するなど、地域社会とともに教育活動に取り組んでいる。

特に、令和元年度は北海道社会福祉協議会の学童・生徒のボランティア活動普及事業の指定校として、清掃活動や募金活動にも取り組むとともに、木育においては幼稚部が地元の保育園と連携した木工、小学部は木材加工会社の見学及び体験を行うなど、社会に開かれた教育課程の実践において大きな成果をあげている。

また、社会で活躍する卒業生をロールモデルとした、自分らしい生き方を探求する「生き方教育」の推進を通して、共生社会の担い手を育成するなど、キャリア教育の充実として高く評価されている。

北海道函館五稜郭支援学校

校長 田 近 憲 二

学級数 4 学級 生徒数 29 名 教職員数 17 名

専門教科を生かした知的障がい教育におけるキャリア教育の実践

永年にわたり、管内最初の職業学科設置の高等部として、開設以来、社会で必要な資質・能力の育成を目指し、生徒一人一人の障がいの状態にきめ細かく対応した学習活動の展開に取り組んでいる。

特に、ビルクリーニングの取組では、地域の公共施設や民間企業等と連携した清掃実習を通して、清掃に関する知識・技能の確実な習得に成果をあげるとともに、平成30年度全国障害者技能大会沖縄大会ビルクリーニング種目において、本道の特別支援学校高等部在学者として初となる金賞を獲得するなど、大きな成果をあげている。

また、高等部開設当初から平成30年度末までの卒業生のうち、就職した生徒の割合が平均で89.2%となるなど、知的障がい教育におけるキャリア教育の実践として、高く評価されている。

函館市立桔梗小学校 山 本 昇 吾 主幹教諭

包括的な学校改善や人材育成の継続・充実に貢献

永年にわたり、教職員をまとめるリーダーとして指定事業の取組や公開研究会等を取り仕切るとともに、平成 30 年度からは、主幹教諭として「学び続ける学校」の具現化に向け、尽力してきた。

特に、令和元年度から、「学校力向上に関する総合実践事業」の実践指定校として包括的な学校改善を支えるとともに、「プログラミング教育事業」の研究実践校として新学習指導要領の理念を実現する授業改善を中心となって進めるなど、学校力向上の取組に多大な貢献をしている。

また、日常的な人材育成を充実させるとともに、学校運営が組織的・効率的に機能するよう、校務支援システムの活用や校務分掌間の調整の中核を担うなど、その取組は高く評価されている。

七飯町立大中山中学校 佐 藤 崇 行 主幹教諭

校務運営組織の改善及び中学校外国語教育の振興発展に貢献

永年にわたり、校務運営組織の改善に中心的な役割を担い、平成 28 年度からは、主幹教諭として校内組織の活性化を進めるとともに、校内の授業改善に尽力してきた。

特に、外国語科の学習指導において優れた実践を積み重ねるとともに、生徒が楽しく英語に親しむことができるよう地域全体の授業改善を推進する役割を担い、七飯町小中高英語連絡協議会のブロック長として優れた取組を管内に発信するなど、外国語教育の改善・充実に多大な貢献をしている。

また、渡島中体連剣道専門委員や渡島檜山学校剣道連盟事務局長として剣道の普及に努めるとともに、部活動を通じた生徒の健全な心身の育成に寄与するなど、その取組は高く評価されている。

北海道函館中部高等学校（全）

白鳥宏之 主幹教諭

コミュニケーションツールとしての英語力を高める指導の実践

永年にわたり、暗記重視だった英語指導をコミュニケーションツールの視点からグループディスカッション等を中心とした授業に転換させるなど、英語力を高める先進的な教育実践に取り組んでいる。

特に、英語教育における指導的な立場として、北海道教育委員会主催の教育課程研究協議会や授業実践講座、他県での英語教育に関する研修会などで講師を務めるなど、道内のみならず全国の高等学校英語科教諭の指導力の向上に多大な貢献をしている。

また、校内では放送部の顧問として生徒が持つ潜在能力を引き出し全国大会出場へ導くなど、その卓越した指導力は、高く評価されている。

道南特別活動研究会

代 表 函館市本通小学校長 鈴木 敏 文

会員数 81名

管内の特別活動の改善・充実の推進

永年にわたり、管内の特別活動の研究の中核として、「特別活動こそ、子どもの個を大切に無限の可能性を伸ばす場を提供し教育を見直す」という理念の実現に向け、活動に取り組んでいる。

特に、令和元年度第63回全国特別活動研究協議大会北海道・函館大会の開催に当たり、運営の中心として大会を成功に導くとともに、新学習指導要領に基づく特別活動の実現に向けた研究の推進に努め、その成果を全道及び全国に発信するなど、特別活動の改善・充実に、大きな成果をあげている。

また、本会の会員が積極的に授業を公開し実践的な研究協議を行うとともに、長期休業期間に外部講師による教育講演会を開催し、教員研修の充実に努めるなど、その成果は高く評価されている。

もりまち太鼓保存会
代表 佐々木 主 計
会員数 16名

郷土芸能である太鼓を通じて地域の活性化に貢献

永年にわたり、町内外の催事等各種イベントにおいて、森町の青年が中心となり、地元の自然をテーマとした曲等を演奏することを通じて郷土芸能を伝承するとともに、地域の活性化に貢献している。

特に、70回を数える「もりまち桜まつり」において、発足以来毎年演奏を披露しており、町内外に広くその活躍が知られ、町の郷土芸能として定着している。その他、介護施設や福祉施設の慰問も行っており、社会福祉の充実にも貢献している。

また、小中学生も所属しており、若い世代への伝統芸能の継承が行われるとともに、小学校社会科副読本「わたしたちの森町」において、本町に伝わる郷土芸能として掲載されている。

砂原権現太鼓保存会
代表 新谷 春 勝
会員数 19名

子どもたちの活躍による郷土芸能の継承

永年にわたり、小中学校の子どもたちが中心となり、町内外の催事等各種イベントにおける演奏を通じて、郷土芸能の継承及び地域活性化に貢献している。

特に、町外での活動については、「日本のまつり（札幌市）」、「北海道洞爺湖サミット歓迎三千人太鼓（函館市）」、「函館開港 150 周年イベント」、「東北新幹線全線開業記念 外ヶ浜港まつり」等幅広く行っており、地域文化の発信とともに、学校外での活躍の場が広がり、子どもたちの自己有用感の育成につながっている。

また、高校生も所属しており、異年齢間での学びの場となるとともに、小学校社会科副読本「わたしたちの森町」において、本町に伝わる郷土芸能として掲載されている。